3) DMP低IQ児に音楽療法を試みて

国立療養所西別府病院小児科
寺田真弓　吉良陽子

＜目　的＞

問題行動があるにもかかわらず、特別な指導を受けることのない知能発達が遅れている子供達が、音楽による心理療法によってどのように変化していくかということに取りくんでみた。

対象児

1	K.A.	(♀)	15才	IQ＝測定不能	入院年数5年　言語障害あり
2	S.T.	(♀)	10才	IQ＝測定不能	入院年数4年　情緒著しく不安定
3	T.T.	(♂)	9才	IQ＝測定不能	入院年数2年　興奮しやすい．情緒不安定．奇声を発する。
4	H.Y.	(♂)	7才	IQ＝田中びね－50	入院年数4ヶ月　言語障害あり

以上4名を対象として行なう。

＜方　法＞

本年度の段階では、まだ療法の場へ適応することを主たる目標とし、対象児4名を同一の場所に集め、いろいろなジャンルの音楽を聞かせ、音楽の嗜好、音楽表現の方法などについて個人個人の様子を観察する。

＜結　果＞

以上のような観察から音楽療法への適応過程を4つの時期にまとめてみた。

即ち、キョロキョロしたり、泣き叫んだりしてその場に落ちつかず、音楽を聞くまでに至らない緊張期。徐々に落ち着きをみせ始め、どうにか30分間その場にじっとして音楽に耳を傾けることができる受容期。その時間を待ち好きな曲、聞きなれた曲を要求するようになる要求期。さらに、曲にあわせて歌ったり口笛を吹いたり、手拍子をとったりなどの音楽表現をみせるようになる反応期である。

音楽療法的な受けとめは、まだ無理であるが、以上の4つの時期を前進後退しながらも今後は反応期をさらに展開することによって対象児の変化を期待している。

個々の対象児についてK.A.は、時間の始めには緊帳しているが、すぐに場に適応し、音楽を待ち望むようになっている。

S.T.は、始めの頃、音楽療法の場につれていくと泣き叫び、4人の中で一番適応しなかったが、次第に治療を待つようになり、更に、時間の終りには、「イヤイヤ・マダマダ」という声も聞けるようになった。集中力には欠けるが、30分間を楽しくすごすようになっている。

T.T.は、音楽療法に対し、あまり抵抗はみせず初回の治療から曲にあわせ、身体を動かせたり、歌ったりしている。回を重ねるごとに身体の動かし方に変化をもたせ表情豊かに歌うようになっている。

H.Y.は、最初から表現があまり無く、30分間おとなしくしている。ただ4人のメンバーに少し慣れてきたという表情の変化のみである。

本年度の音楽療法は、この程度で、まだ病棟内における彼らの行動に治療効果を見るに至っていな

い。今後、数年間この治療を続け、彼らの行動に変化を望む。

4) 日　課　表　の　再　検　討

国立療養所川棚病院
坂田秀子　　富永恒子

＜はじめに＞

決まった日課の中で、子供達が規則に縛られず、気持ちよく、明るい療養生活が出来るように、前回に提出した議題による日課表の再検討をした。従来の日課表は、スケジュール一杯で、子供達に病院生活が単調な毎日の印象を与えていた。そこで、この日課表で、改善出来るものはないかと検討した結果、普通の子供達に比べ自由時間が少ない事と、日課が規則的で特別の変化がない事があがり、次の４点を工夫し５ヶ月間実施した結果をアンケート調査した。

＜方　　法＞

①毎週日曜日、起床時間を３０分遅らせてみた。②戸外に出る時間を多くもった。③新たな約束事を設けるときは、子供達と話し合によって決める。④もっと子供達の遊びの中に入っていく。
①に対しては、毎日６時起床のところ、祭日・日曜日は、６時３０分に起床させるようにした。
②に対しては、各職種（ＰＴ、指導員、保母、看護職員）と話し合い、週１回、木曜日、晴天の日を散歩日と決め、リハビリテーションの一環として院内散歩を始めた。③に対しては、子供達の意見をとり入れ一方的な押しつけでない事を理解させた上で決めた。④に対しては、子供達がグループを作って遊んでいる中に入り一緒に遊ぶ事にした。以上を実施し意識調査のアンケートをとった。実施期間６月～１０月迄、対象学年、小学３年～高校２年迄の２６名、表①②③のアンケートについては、子供達のしてほしいことが割合叶ったということのようですが、表④については、職員の都合で、途中から入ったり、又、途中で遊んでやれなくなったりした事があり結果が悪かった。その他の希望をかかせたところ、表Ｖの通りです。

＜おわりに＞

５ヶ月間の実施でアンケート調査の結果、ある程度、要求が叶えられたものを受けとったが、散歩に連れていく場合にも、遊んであげる時も、職員の数が少ないことと、子供達の希望する場所の選定の困難なことが問題であり、特に散歩日は週休なしで出勤しても、１人で何人もの車椅子を押して行かなくてはならず大変であった。

＜考　　察＞

特に今後はマンツーマンの必要な患者ばかりで子供達の希望である外出を多くし、町まで散歩に行くことになると、監視役である保母・看護職員の数の制限問題がある。できる限り希望にそっていきたい。自由に動かせない子供達にも日常の療養生活の中の看護面、等を工夫することで、心を豊かに

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<目的>

問題行動があるにもかかわらず、特別な指導を受けることのない知能発達が遅れている子供達が、音楽による心理療法によってどのように変化していくかということに取りくんでみた。